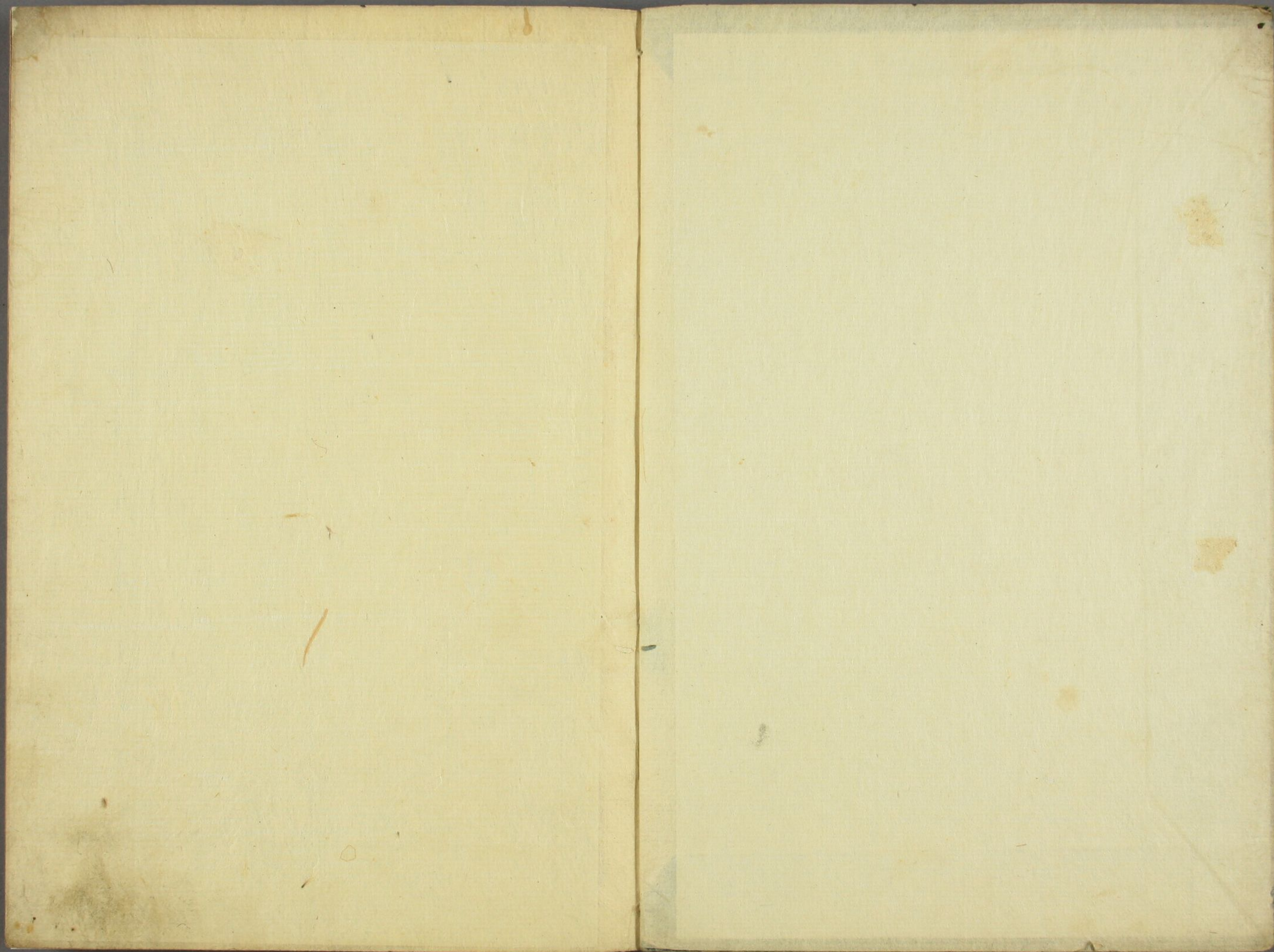




源氏綱目

一





源氏細目序



光源氏乃物さうの平祐らさるを廣く
らうに流くは何とこのありとさうさう
さう此故に今ま記くさうさうさうの
事とを残さうと志す又ま事とを別
詞と事とと書きて侍ら次らむら
か事とを繕う一人の終の印と書装束の色と
わらさうさうにわら繕うかく理と所の詞と



今海鏡と入半二巻依りて一部の大観と
 一巻ト學の從一わりのより多く中はく念持
 孝く源氏從月堂いふ于特為治已之矣年
 屋のし吉辰落下一花雲接傳野初切際
 又二巻と緝録と

け物徳の他者

四巻抄より治大細云物徳の徳成り又徳事為財
 けくしある酒のなる中を娘にわせば年々
 女房の袖中しより半巻もよみしんをひかひか
 ありしはねは武部之度や九人ある様はひひは
 きい文たし世日記のしりくさるん出く史記より
 よしとあひのせきりり天名古中をくわひし正親
 乃妙理とけいしん志るがく女房のしりくさるん出く
 〇花鳥傳徳云世日記のしりくさるん出く史記より
 世をよらぬいづわひし源氏と徳のしりくさるん出く

人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の
人始を以ていふ物に人國に在るは其の

かばりちとていふまに文集とていふ
いまも志のいふ樂府といふとていふ
乃曰く志のいふ樂府といふとていふ

崇武部系名 日奈入 良門
大織冠大行孫用院九大臣を制する男勝
九大臣三位年表あり祖勅條あり祖

判基 賜正一位 兼補 中納言 惟正
刑部大補正

高村 兼正 賜正一位
号崇武部系名長物鏡信長上京の院女房母
兼正は高村の系名を信長に傳へて

河津抄云崇武部鷹司殿
後一位倫子一條
大正雅信云女三ツツツ 官中も相繼信長上京の院

云信長も又被友也の義也
乃軍抄云信長は權位官存も嫁して大貳三位局 扶養者

よきと云流二條三親所南帝極の物類に今東院
乃通院上東門院の正位也又武部が墓所云林院
の白毫院の南東院管う墓の西之字法廣法日記小も
其野云林院あるより見まく本二行淳和天皇此雜
文也今の文法もあつるといふゆゑ一學本を云
林院まふべきことと云ふことせして法廣中あり又武部ハ
檀那院賜僧正の許下と云ふ天台一公三親の血脈ハ
入道と云ふは密教云林院の迷因と云ひ志のけるも中
へあるは又いふは武部ハ親者乃其身也云々
。一華堂云親者の二所中法廣のま候も女人は位也

事五通瑞二十二云云唐の憲宗元和十一年馬房婦
のいふ女主人はたれ世村と云ふ事法廣男ありてよく
わが持する所の神書に記すと云ふよと云ふは瑞と云ふ
よと云ふもの二十よと云ふ婦の云と云ふてあまの
ろくは死んしと云ふ貞義をむけ又と云ふ對般のよと
ゆむるに一夜よと云ふ人又と云ふ又法也絶て世よ
はと云ふよと云ふえたらひ記通せんといふ馬氏子といふ
日よと云ふ婦又母にまうと云ふと云ふ人記と云ふ
少と云ふと云ふ婦といふは命といふ印財の者やぶ
まはと云ふと云ふつるの葬に救世と云ふと云ふ老僧

いふ事も是れ百法に非ざるべしとて其の行をりしむるに
の事ありしに上人の遺教を承りしつらしたるに親善の院の
差に蓋し拵りし人なりとて二月十八日に考案し
此より上人の遺教を承りしに非ざるべしとて
小今二八月の十日に上人の遺教を承りしに非ざるべし
希代と

廿物院の教記

四重抄云云にありしに上人の遺教を承りしに非ざるべし
へし是れ式部上東門院（五重抄）の官守の位上東門院（六重抄）
院（七重抄）の村の事なりとて

さきまのころに上人の遺教を承りしに非ざるべしとて
あつたに非ざるべしとて式部上東門院の官守の位上東門院
院の村の事なりとて
寺に遺教を承りしに非ざるべしとて
月夜に上人の遺教を承りしに非ざるべしとて
公に遺教を承りしに非ざるべしとて
よみてはる巻に上人の遺教を承りしに非ざるべしとて
かゝるに上人の遺教を承りしに非ざるべしとて
云いしに上人の遺教を承りしに非ざるべしとて

大信の公延喜會子母源 延喜會子母源 延喜會子母源
を宰相に先遷せらるる公の一人也 延喜會子母源
公の一人也 延喜會子母源 延喜會子母源
公の一人也 延喜會子母源 延喜會子母源
公の一人也 延喜會子母源 延喜會子母源
公の一人也 延喜會子母源 延喜會子母源

時代

昇龍二十六年一傳院の寛弘の末に遷りて
之代堀河院の康和の末に遷りて寛弘の末
より康和の末に遷りて寛弘の末
より康和の末に遷りて寛弘の末
より康和の末に遷りて寛弘の末

寛弘の末に遷りて寛弘の末に遷りて
寛弘の末に遷りて寛弘の末に遷りて
寛弘の末に遷りて寛弘の末に遷りて
寛弘の末に遷りて寛弘の末に遷りて
寛弘の末に遷りて寛弘の末に遷りて

文法

一華書に莊子が高言に云く高の言也莊子
他人の名をよめていふ事多し華書に
十篇あり又高の根を考ふる人
はく高の言に云く高の言に云く
人高の言に云く高の言に云く
高の言に云く高の言に云く
高の言に云く高の言に云く

然るも、（一）欲あつては、（二）民を治むるの本なり。欲あつては、（三）地あつても勇たつては、（四）民を治むるの道欲あつては、（五）且、勇あつても、（六）徳たらねば、天下の事、おひ能せん。分あつて、（七）知し、（八）欲し、（九）勇と、（十）徳との、（十一）道あつても、（十二）文、（十三）礼、（十四）樂、（十五）と、（十六）いふ、（十七）礼、（十八）九、（十九）末、（二十）有、（二十一）節、（二十二）制、（二十三）倫、（二十四）行、（二十五）の、（二十六）辞、（二十七）あつて、（二十八）志、（二十九）と、（三十）する、（三十一）を、（三十二）和、（三十三）す、（三十四）ん、（三十五）樂、（三十六）と、（三十七）いふ、（三十八）中、（三十九）公、（四十）和、（四十一）平、（四十二）にして、（四十三）可、（四十四）愛、（四十五）と、（四十六）中、（四十七）節、（四十八）率、（四十九）度、（五十）矯、（五十一）激、（五十二）た、（五十三）る、（五十四）を、（五十五）治、（五十六）と、（五十七）知、（五十八）し、（五十九）勇、（六十）た、（六十一）徳、（六十二）と、（六十三）いふ、（六十四）則、（六十五）は、（六十六）徳、（六十七）全、（六十八）く、（六十九）は、（七十）兵、（七十一）一、（七十二）吾、（七十三）成、（七十四）名、（七十五）の、（七十六）也、（七十七）。元、（七十八）高、（七十九）と、（八十）吾、（八十一）神、（八十二）の、（八十三）至、（八十四）察、（八十五）は、（八十六）淳、（八十七）氏、（八十八）物、（八十九）類、（九十）と、（九十一）いふ、（九十二）一、（九十三）河、（九十四）海、（九十五）抄、（九十六）云、（九十七）八、（九十八）十、（九十九）代、（一百）海、（一百一）多、（一百二）好、（一百三）院、（一百四）の、（一百五）正、（一百六）治、（一百七）奏、（一百八）園、（一百九）林、（二百）と、（二百一）いふ、（二百二）龍、（二百三）象、（二百四）と、（二百五）いふ、（二百六）一、（二百七）。

淳、（一）氏、（二）物、（三）類、（四）と、（五）いふ、（六）一、（七）河、（八）海、（九）抄、（十）云、（十一）八、（十二）十、（十三）代、（十四）海、（十五）多、（十六）好、（十七）院、（十八）の、（十九）正、（二十）治、（二十一）奏、（二十二）園、（二十三）林、（二十四）と、（二十五）いふ、（二十六）龍、（二十七）象、（二十八）と、（二十九）いふ、（三十）一、（三十一）。元、（三十二）高、（三十三）と、（三十四）吾、（三十五）神、（三十六）の、（三十七）至、（三十八）察、（三十九）は、（四十）淳、（四十一）氏、（四十二）物、（四十三）類、（四十四）と、（四十五）いふ、（四十六）一、（四十七）。河、（四十八）海、（四十九）抄、（五十）云、（五十一）八、（五十二）十、（五十三）代、（五十四）海、（五十五）多、（五十六）好、（五十七）院、（五十八）の、（五十九）正、（六十）治、（六十一）奏、（六十二）園、（六十三）林、（六十四）と、（六十五）いふ、（六十六）龍、（六十七）象、（六十八）と、（六十九）いふ、（七十）一、（七十一）。

光、（一）淳、（二）氏、（三）物、（四）類

淳、（一）氏、（二）物、（三）類、（四）と、（五）いふ、（六）一、（七）河、（八）海、（九）抄、（十）云、（十一）八、（十二）十、（十三）代、（十四）海、（十五）多、（十六）好、（十七）院、（十八）の、（十九）正、（二十）治、（二十一）奏、（二十二）園、（二十三）林、（二十四）と、（二十五）いふ、（二十六）龍、（二十七）象、（二十八）と、（二十九）いふ、（三十）一、（三十一）。元、（三十二）高、（三十三）と、（三十四）吾、（三十五）神、（三十六）の、（三十七）至、（三十八）察、（三十九）は、（四十）淳、（四十一）氏、（四十二）物、（四十三）類、（四十四）と、（四十五）いふ、（四十六）一、（四十七）。河、（四十八）海、（四十九）抄、（五十）云、（五十一）八、（五十二）十、（五十三）代、（五十四）海、（五十五）多、（五十六）好、（五十七）院、（五十八）の、（五十九）正、（六十）治、（六十一）奏、（六十二）園、（六十三）林、（六十四）と、（六十五）いふ、（六十六）龍、（六十七）象、（六十八）と、（六十九）いふ、（七十）一、（七十一）。

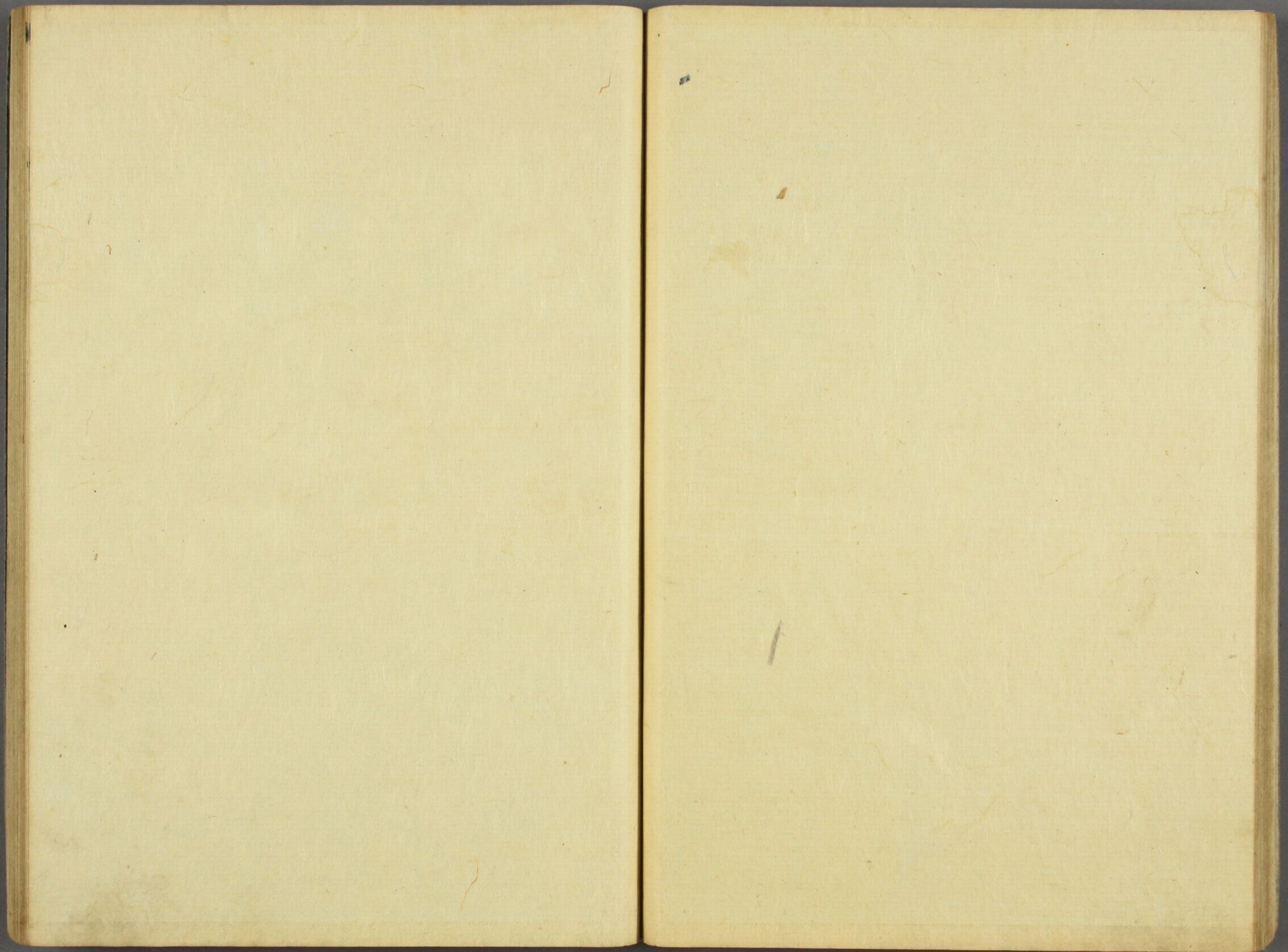
又光原より大日より源一の和光同義の元神也
此の字は始母を終の作より神道に宗派の字く
光原の二字は万物の長流也いふより一切の支配
音意ハ始より終まで一物ハ万物也此の字は
源流の字は多岐にわたるの字は法蓮華經の文は
此の周易に云く乾元亨利貞の字は万物の
一物鏡の字は万物の神父の事の人を多岐にわたる
乃秘変ハ理の多岐にわたるの神父の事ハ心傳公
此は心脈の字に天脈也とて十界とてんはか
流の字は對するもなり

源氏綱目

相壺 卷之一

相壺の文の事とて是の事ハ源氏物語
に云く十二卷の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ
此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ
此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ

一相壺のみハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ
此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ
此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ
此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ
此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ





帚下 卷之二

春名之とて討まへ源氏十右衛門の女山乃半也
 一月もあはれなまをまは田の古相をこころおきて源氏
 旧書に在るも舟入の左大臣乃老達まへ源氏の御
 定書に相つかのまははつしりもままよし一獲一生の御中
 おいそぎ五人の御よもままきへ源氏も別まに掃きもた
 まへしよもまもまへしきへあるまへははらひ毎切打甚ま
 源氏御書より見ゆまを御中おゆりしりし御書よりみま
 乃御たる又たよし一御まよまへし御書よりみま
 ありし御書より見ゆまを御中おゆりしりし御書よりみま

源氏物語のしるしに九帳をききしは物ごころに
まよ源氏物語のしるしにわらわのまよるるにまよるる
神由よりいふに源氏物語のしるしに記す
中川の源氏物語のしるしに記す
よにいふ海に記す
あまの氷のしるしに記す
ふとていふしるしに記す
しるしに記す
はる志のしるしに記す
一記す

源氏物語のしるしに記す
中川の源氏物語のしるしに記す
よにいふ海に記す
あまの氷のしるしに記す
ふとていふしるしに記す
しるしに記す
はる志のしるしに記す
一記す

大也... 一連歌の用(回)

南... 南... 南...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

... 有... 有...

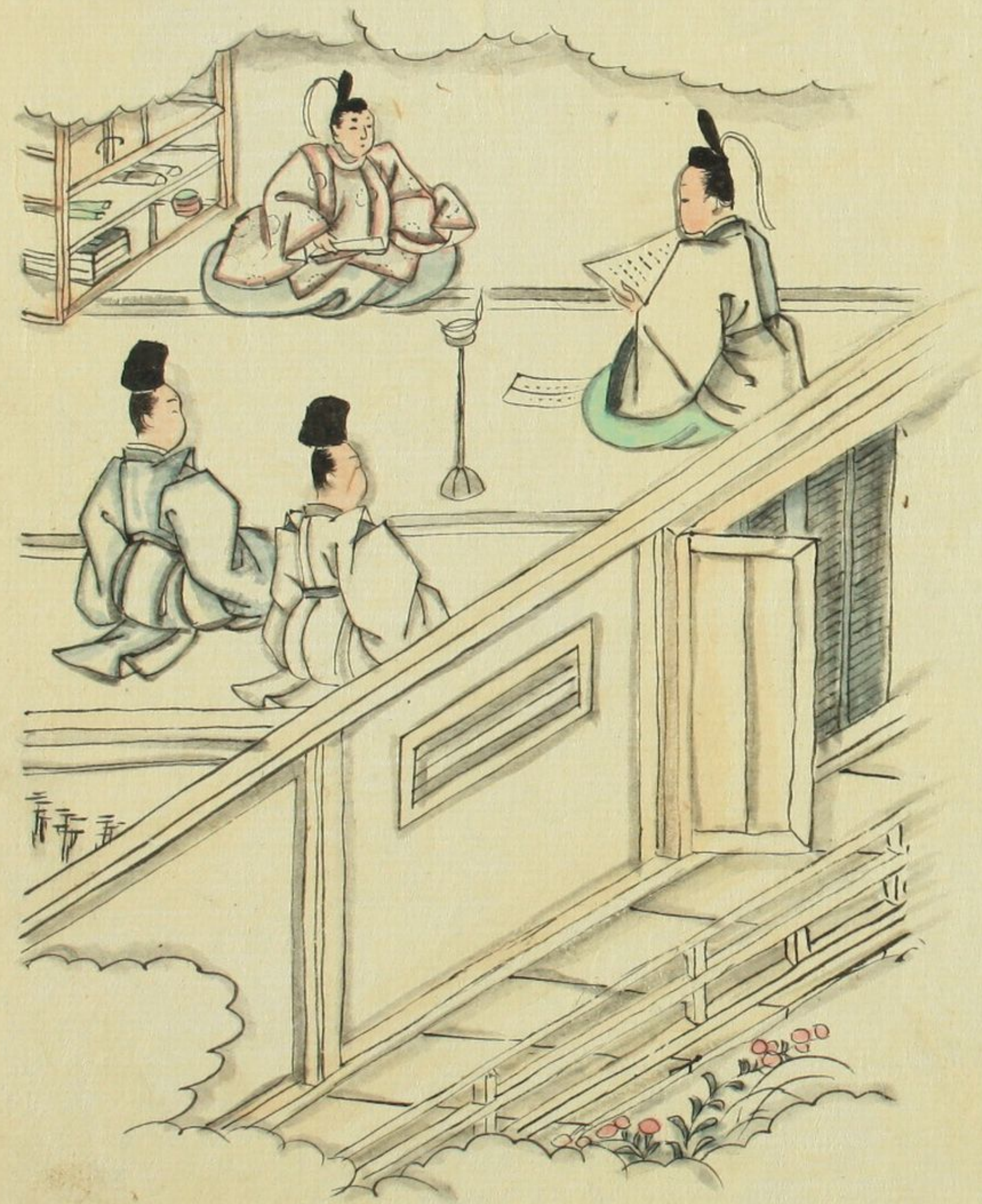
Handwritten text in cursive script, likely a list or index. The text is written vertically and includes various characters and symbols, possibly representing names or titles. The script is dense and characteristic of historical Japanese calligraphy.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index from the previous page. The text is written vertically and includes various characters and symbols, possibly representing names or titles. The script is dense and characteristic of historical Japanese calligraphy.

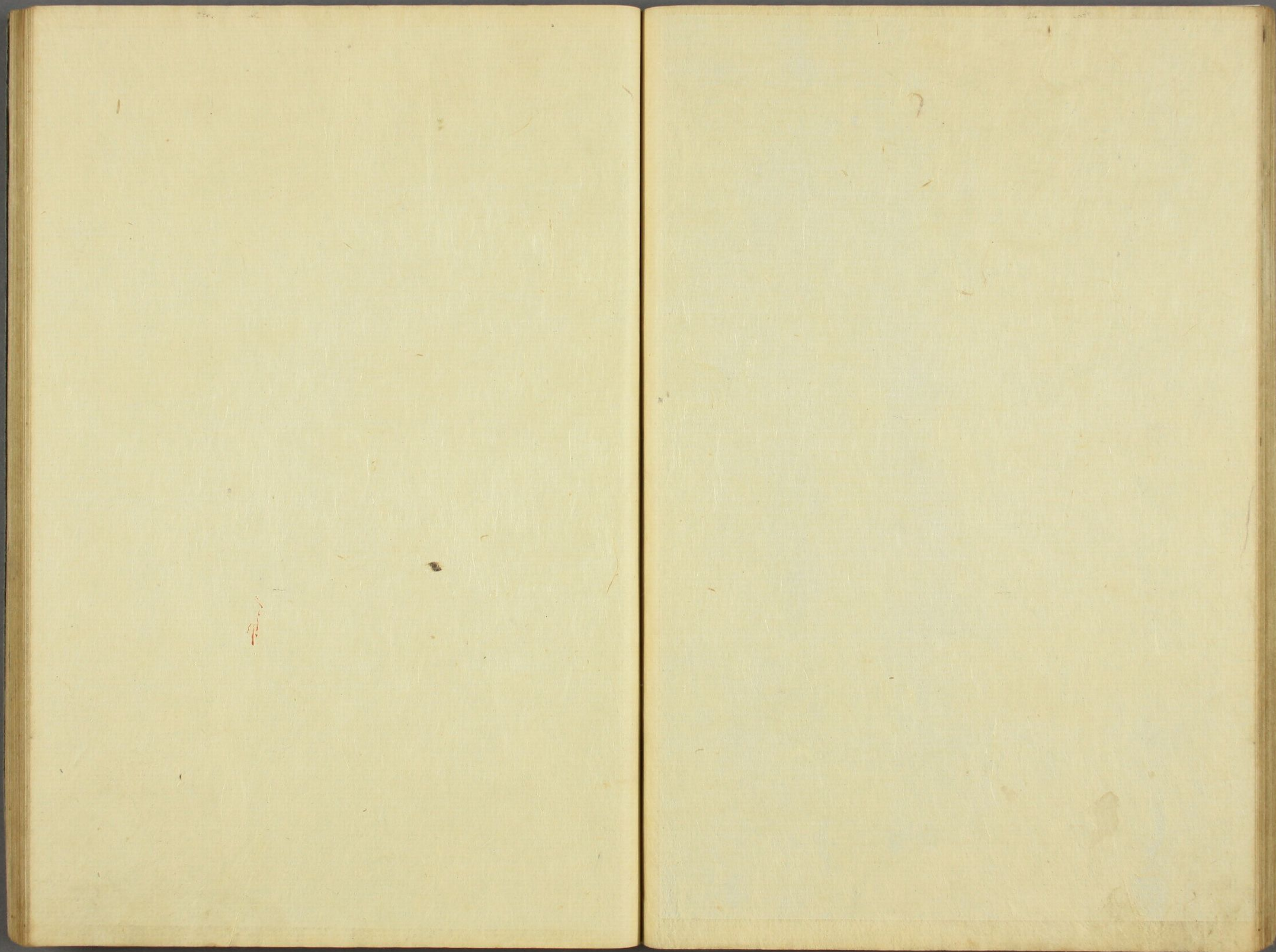
بسم الله الرحمن الرحيم
الحمد لله رب العالمين
والصلاة والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين
الذين هم خاتم النبيين
مؤتمرون بهم ولو شاء
الله لذهب الله عنهم
الرجس ويخلف الله
من يشاء

بسم الله الرحمن الرحيم
الحمد لله رب العالمين
والصلاة والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين
الذين هم خاتم النبيين
مؤتمرون بهم ولو شاء
الله لذهب الله عنهم
الرجس ويخلف الله
من يشاء

بسم الله الرحمن الرحيم
الحمد لله رب العالمين
والصلاة والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين
الذين هم خاتم النبيين
مؤتمرون بهم ولو شاء
الله لذهب الله عنهم
الرجس ويخلف الله
من يشاء



お母おやあまのまゝりやとまひりけしるまゝし
 きんこいだんこいひきいさり大あつ涼女おん
 一出一せまは頭中おろはるのるかことあま
 涼女おんまゝり



物にひらきかからしむるも
あやうくしりりたてて
二条院にたてしむる
一まじ款は用ひし詞并し

かづいぶもん
あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

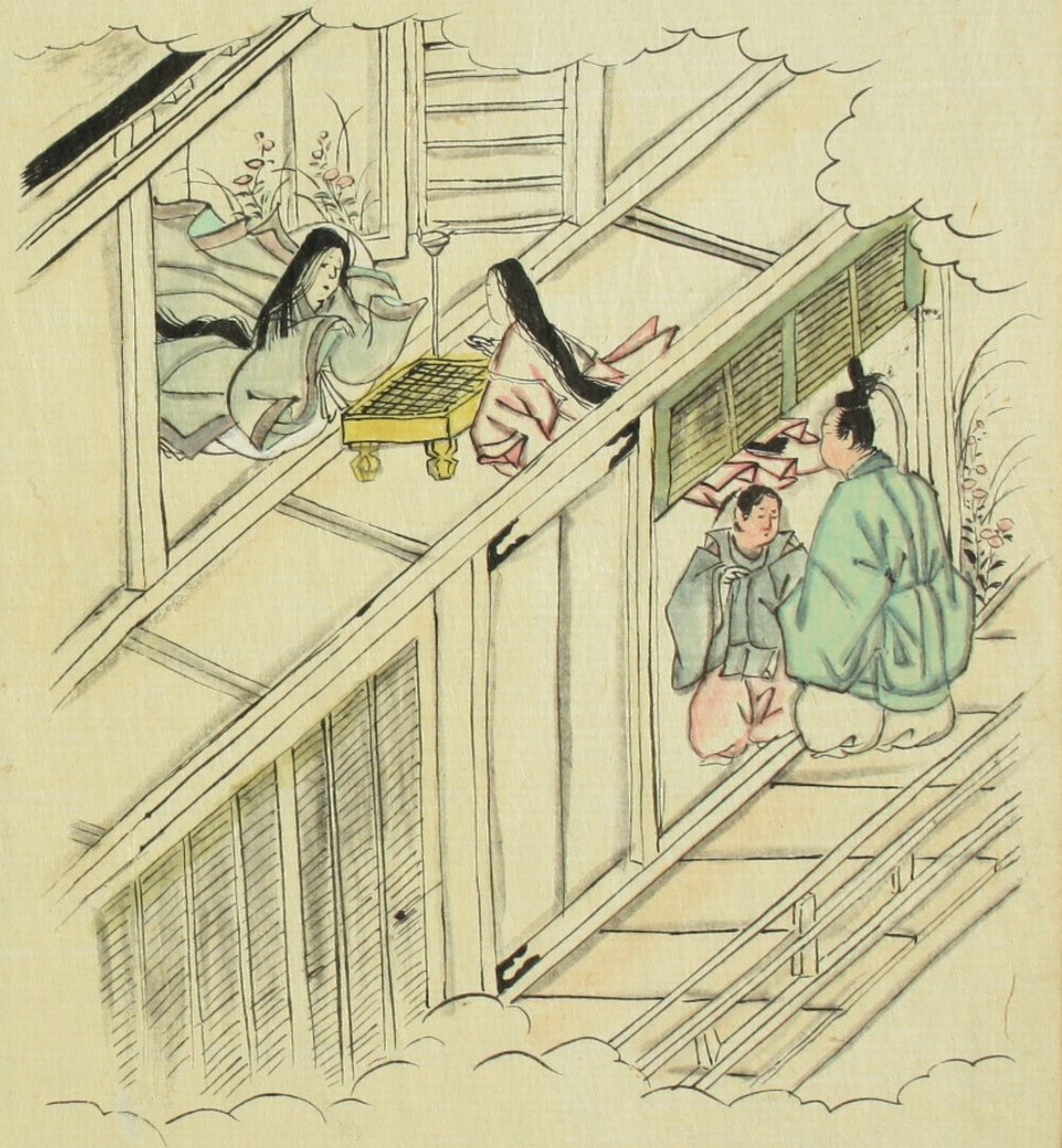
あまのけし
おげふん

あまのけし
おげふん

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or historical document. The text is written in a cursive style and includes several lines of prose. There are some red markings, possibly indicating corrections or emphasis. The text is written on aged, yellowed paper.

Handwritten text in Arabic script, continuing from the previous page. The text is written in a cursive style and includes several lines of prose. There are some red markings, possibly indicating corrections or emphasis. The text is written on aged, yellowed paper.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, written on aged paper. The text is oriented vertically on the right page of an open book. The script is dense and difficult to decipher, but appears to be a form of early modern European cursive. The text is written in dark ink on a light-colored, aged paper. The left page of the book is blank.



よきなりきりてははるかにあはれむに
母也十七日のあはれむに
少く多部野はたぬわする推光が父の乳母の
やも流氏の推光がうたぐ二重院へては
乃時を推光二重院へては
源氏日記にふたりの推光と
母からして推光はさくたぬわする
よきなり
一志子の二重院へては
乃娘なり初めは十一日母の
母の父の位

中おのりてははるかにあはれむに
頭中おのりてははるかにあはれむに
よきなりきりてははるかにあはれむに
乃娘なり初めは十一日母の
母の父の位

あつよんがーとておまへにのこしきまハタの上よりみま
乃名に名まひし也

一 流女若おつしと我にえさせよ又の上の形見をせん
ちよよのま

一 夕雲上の世ひは流女つらひのまを輝ひきもちて
乃妻とてしりましは流女といふま

一 新増萩は流人少羽の妻もあると流女より小若と
使とて又つらひし

かのうも新若の萩と流女は流人のおとたは
十月お日の上と上十九日のおつらひは教エの流華堂

小てし流華堂衣と持物ホクモツなり

一 五糸と上乃名ありト揚名女が妻は夕雲上のあま
ある乳母の婿おひ乳母に子二人あり二人は

一人は流人へ仕付くと二人はまうつらひしとておまへ
西京の乳母の子はあは流別より上乃の乳母おひが

一 十月お日よ保方女ひまらちのまにまらやまを対流女より
残ハナしとてまは流人へ根を流女をどつらひしとておまへ

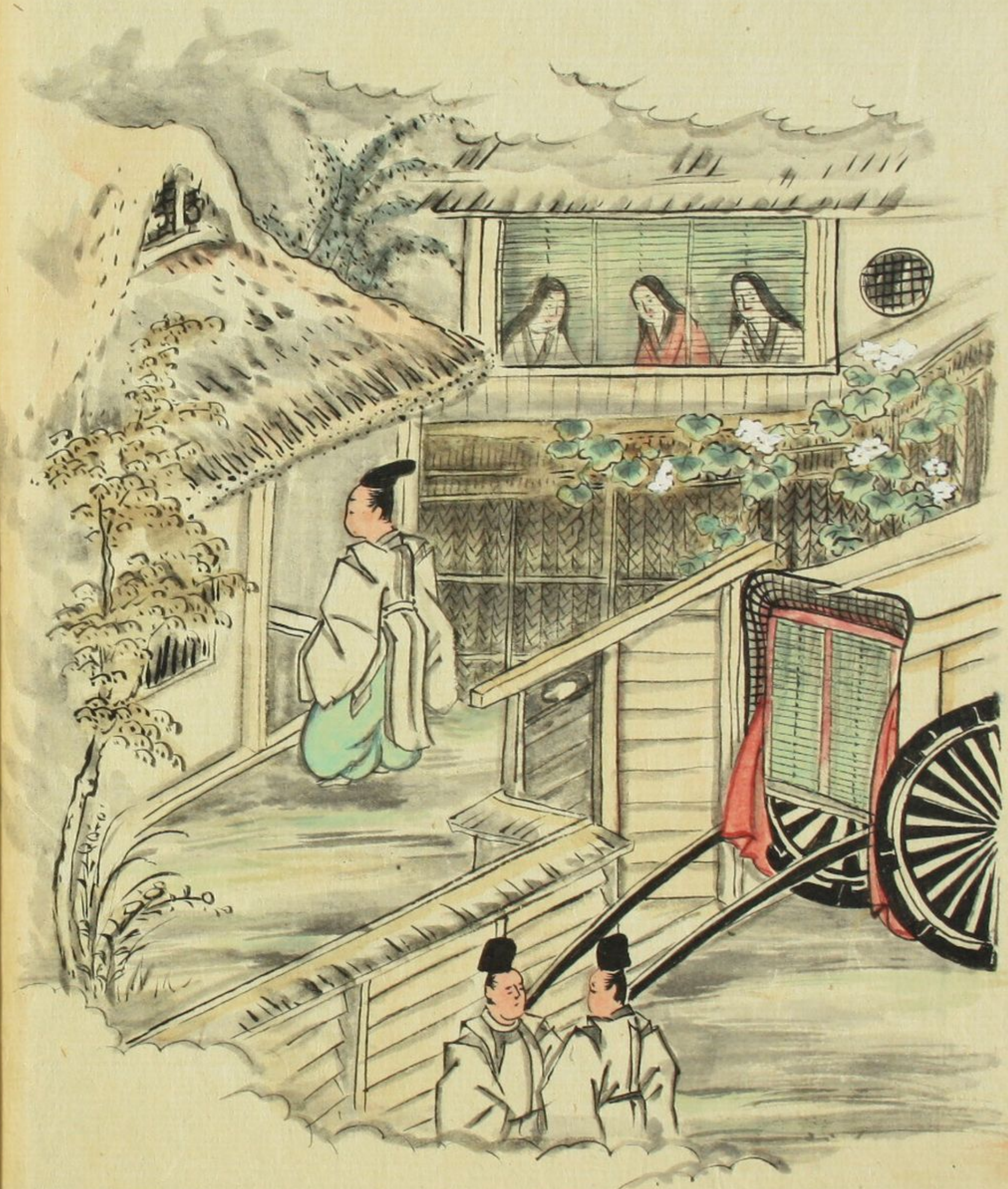
まへしける小樹コキよりつらひしなり
一 まし敬し用へし流人なり

小家がちにしりげおねんりのまらものもい流女ヲヒメの流

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense, cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense, cursive writing.

たてふくし人のよこしはしるこゝろかきかたはしるこゝろ
涼しげなるおひさまよこしはしるこゝろかきかたはしるこゝろ
おのころかきかたはしるこゝろかきかたはしるこゝろ
おのころかきかたはしるこゝろかきかたはしるこゝろ



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, spanning two pages. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and continuous across both pages, with some variations in line spacing and ink saturation. The right page contains approximately 10 lines of text, while the left page contains approximately 5 lines. The overall appearance is that of a well-preserved but aged historical record.



